

使い回し

木下, 善貞
北九州市立大学外国語学部 : 教授

<https://doi.org/10.15017/6792849>

出版情報 : 九大英文学. 50, pp.485-486, 2008-03-31. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



使い回し

木下 善貞

北九州市立大学の木下善貞です。「ジェイムズ・ジョイス『若き日の芸術家の肖像』——死と再生——」という題目で最初の論文をケアン15号（1972年7月）に掲載しました。自分の書いたものを活字にして見たときには感激しました。当時の慣例でこのケアン論文を英語にして修士論文としました。当時のものをいま読み返してみると、文章のひどいこと、何でもかんでも詰め込もうとしたことが大失点であると思います。簡単に言うと、読んでくれる人のことなど眼中にない書き物です。たとえば、「学寮生活という新しい外界の現実に対応することのできない少年ステイーヴンのペルソナは……」というような長い主語が出てきます。いまではこんな長い主語はけっして使いません。いまは主語を人にしてできるだけその視点を固定し、読み手の注意がぶれないように工夫しています。わたしのケアン論文にはこのような配慮がまったくみられません。内容の点では、いろいろな批評家の意見を勉強したまま、とにかくたくさん詰め込もうとして——intertextualityの観点からは標本ともいえるごった煮になっています。1997年に『英国小説の「語り」の構造』（開文社出版、3,200円）を書くとき、このケアン論文を書き直して再利用しました。（『物語のナラトロジー：言語と文体の分析』のなかでわたしのこの本からの引用が頻繁になされています。わたしの本のほうの購入をお願いします。）『肖像』についてのこの論文をさらに書き直して「映し手」と「内的焦点化」というキーワードのもとに博士論文の一部としました。ケアン論文でとらえた発想、主人公の意識面の変革が物語の構造を創り出すという発想が骨組みとして現在までそのま

ま残っているのは自慢の種です。ケアンの論文をこれほど使い回しにした教員も珍しいと思います。若い頃のほうが勉強そのものはずいぶんしていました。結局、年を経てうまくなったものは文章の技巧だけではないかと思います。ということは、若いときは論文をうまく書くことに腐心するよりも、やはり生意気にテキストの核心部分に迫っていくほうが役に立つということでしょう。